

今昔物語は、古文の教科書にあるような平安の「かな」文体ではなく、半分漢文調で記述されている。漢文学習者にはよくお目にかか
る文字・読みが多いから、かな文学より読みやすいかも。ただし現
代仮名遣い混在。

今は昔、京より東あづまの方かたに下る者ありけり。いづれの国、郡とは知らで
一つの郷さとを通りける程に、俄にわかに姪いんよく欲盛よくんにおこりて、女2の事のものに狂
ふが如くに思えければ、心を静め難くて思ひあつかいける程に、大路の
ほとりにありける垣かきの内に、青菜と言ふ物、いと高く盛りに生なひしげり
たり。十月許ほかりの事なれば、蕪かぶらの根大きにしてありけり。この男、忽たちまち
に馬より下りて、その垣かきの内に入りて、蕪の根ねの大きなるを一つ引きて
取りて、それを彫3りて、その穴を娶とつぎて姪いんよくを成してけり。さて即ち、垣
の内に投げ入れて過ぎにけり

その後、その畠の主、青菜を引き取らむが為に、下女共あまた具もし、亦また
幼き女子共など具して、その畠に行て青菜を引取る程に、年十四五許な
る女子の、未だ男には触れざりけるありて、そを、青菜引取る程に、垣の
廻まわりありきて遊びけるに、かの男の投げ入たる蕪を見付て、「ここに穴を
彫ほりたる蕪かぶらあるぞ。こは何ぞ」など言いいて、暫くもてあそびける程に、
皺しわひ干かたりけるを搔かき削けずりて食くいてけり。さて、皆従者共具して家に返りぬ。

その後、この女子、なにと無く悩まし氣にて、物なども食はで、心地
例ならずありければ、父母、「いかなる事ぞ」など言いひ騒さわぐ程に、月つきごろ
を経るに、早はやう懐妊わいじんしけり。父母、いとあきましく思て、「いかなる業を
したりけるぞ」と責め問ければ、女子の言わく、「我、更さらに男の当りに寄
る事無し。只怪あやき事は、然しかの日、然しかかありし蕪を見付てなん食くひたりし。
しかの日より心地も違ちがひ、かく成りたるぞ」と言いけれど、父母、心得
ぬ事なれば、これをいかなる事とも思はで、尋ね聞けれども、家の内の
従者共も、「男の辺へたに寄る事も更に見ず」と言いいければ、あきましくて月
ごろを経る程に、月既に満て、いとつくし氣なる男子を平かに産うみつ。

その後、言う甲斐無き事なれば、父母これを養やしないて過ぐる程に、かの
下りし男、国に年ごろありて上りけるに、人あまた具して返るとて、そ
の畠の所を過けるに、この女子の父母、亦またありし様に、十月許の事なれ
ば、此の畠の青菜引取らむとて、従者共具して畠はたにありける程に、この

1 傍線は読解に役立つ重要語なので辞書などで調べてください。数字は注と読解で意識するポイント。(岩波文庫版利用)

2 女への性欲が狂うように起こって情欲を静められず持て余して

3 とつぐに交接する。姪に射精。それ(蕪)を彫ってその穴に交わって射精をした。カブは丸いですからね、美尻かも。

4 古文常識的には、平安の娘は結婚しても親の家に住み続ける通い婚、女の家にに生計をたよる男も多く、男を暗に選別していた。もちろん農村は貴族社会ではない。だが、女と子供は家にとどめ男を呼ぶのは共通かもしれない。

男、その垣辺を過ぐとて、人と物語しけるに、いと高やかに言ける様、「哀れ、一とせ国に下し時、ここを過し。術無くつびの欲しくて堪へ難かりしかば、この垣の内に入て、大きなりし蕪一つを取て穴を彫て、それを娶ぎてこそ、本意を遂げて垣の内に入てしか」と言ひけるを、この母、垣の内に入てしたしかに聞きて、娘の言ふ事を思ひ出て、怪く思へれば、垣の内より出て、「いかに、いかに」と問ふに、男、「蕪盗みたり」とて、咎めて言なりとて、「たはごとくに侍り」とて、只逃に逃るを、母、「極て大切の事共のあれば、必ず承らむと思ふ事の侍る也。我が君宣へ」と泣く許に言へば、男、様ある事にやあるらむと思て「隠し申すべき事にも侍らず。亦、自らが為にも重き犯しにも侍らぬぞ。只、凡夫の身に侍れば、⁶しかじかのはべりしぞ。我と物語のついでに申しつる也」と言うに、母、これを聞て涙を流して、泣たく男を引へて家に將て行けば、男、心は得ねども、強に言へば家に行ぬ。

⁶ これこれの事をしましたのです。

その時に、女「実には然々の事のあれば、その見をそこに見合はせむと思ふ也」と言いて、子を將て出て見るに、此の男に露違いたる所無く似たり。その時に、男も哀れに思て、「きは、かかる宿世もありけり。こはいかがし侍るべき」と言ひければ、女、「今は、只何かにもその御心也」と、児の母を呼出て見すれば、下衆乍もいと清気也。女の年、二十許なる也。児も五六歳許にて、いといづくし気なる男子也。これを見て思ふ様、「我れ京に返り上てあらんに、させる父母・類親もたのむべきもなし。只、かばかり宿世ある事也。只、これを妻にて、ここに留りなむ」と深く思ひ取りて、やがてその女を妻として、そこになむ住みける。^Aこれ希有の事也。されば、男女娶がずと言へども、身の内に姪入ぬれば、^Bかくなむ子を生みけるとなむ語り伝へたるとや。

問1 傍線A、男はなぜこの所で住むことにしたのか説明せよ。

問2 傍線B、身のうちに淫をいれるとはここでは何を言っているのか。

⁵ どうしようもなく女陰(つび)が欲しくて耐え難かったので